文学教育の基本

磯貝英夫

一

国語教育のなかにおいて、文学は、本来的に、どのような位置を占めるべきものなのか。あるいは、文学教育は、国語教育のなかで、はたして特立させられるべきものなのかどうか。こういう問題は、すべて自明でない。問いつめられることが少なく、問われても異論が多い。私は、ここで、これらの原理的諸問題について、端的に、私の考えを示したい。すでに、自明でないと言った。すべては、私個人の責任における判断である。

二

最初に、国語教育のなかにおける文学の位置について。

考察の前提として、まず、ここで文学そのものをどう考えるかについて、あきらかにしておかなければならない。

私は、国語教育のなかの文学を、広義の文学と、狭義の文学との二つに分けて考えたい。狭義の文学とは、詩・小説・戯曲などの言語芸術、つまり、いま普通に言う文学をさす。広義の文学とは、それに、さらに、いわゆる評論・随筆の類を加えるものとする。

この広義の文学は、東洋における古来の文学概念にほぼ近いものとなる。それを一口で定義するとすれば、簡明に、人間を追求する文章表現のいっさい、と言ってみたい。この「文章表現」は、対象をそのままに現前化させる芸術的表現と、それを知的に対象化する概念的表現との両者を含んでいるが、この二方向の表現質をあえて弁別せず、人間の表現ということで一つにくるめて、それに、広義に、文学という名を与えてみたいのである。これが私の出発点である。そして、そのうえで、この広義の文学の、文学教育のなかの位置について、考えてみたいのである。

国語教育は、言うまでもなく、日本のことばの教育である。このことに何の異存もありえない。しかし、ことばの教育ということは、たとえば歴史の教育といったような、一義的な、簡明なかたちでは成立しない。

それは、ことばが、それ自体、ひとつの体系を持った知的領略対象であると同時に、それの指示する言語外対象にささえられてはじめて実質化するという、二重の性格を持った存在であるからである。

たとえば、「くじらは魚である。」という言語表現があるとする。この文は、純粋な言語次元のうえでは、いささかもまちがっていない。しかし、この文の指示する内容そのものについて言えば、あき

らかにあやまりである。つまり、この文は、文として成立しても、事実にささえられないことによって、虚言と化しているのである。

こうしたばあい、ことばを教えるとは、いったいどうすることなのか。文の構造と、表現面の意味連関とさえあきらかにすればそれでいいのであって、その表現内容の当否は国語教育の問うところでないとするのは、一つの立場である。そういう立場からの徹底した実践がもしあるとすれば、私は、それを尊重するのにけっしてやぶさかではない。しかし、現実には、そういう実践は存在しないと言ってよいようである。程度論的な主張や実践にはこと欠くことはないが、厳密な意識的貫徹には、まだ出会ったことがないのである。

そして、そのことを私は自然だと考えるのである。さきに指摘したように、言語表現は、その指示する言語外世界へ、もしくは、ことばとその指示対象との未分化一体の世界へ、読者を送りとどける。そこへ送りこみながら、その世界について立ち入って考えることを禁止するのは、いかにも、不自然な姿勢である。読むとは、ことばが指示し、あるいは象徴する世界へいたりついて、それを了解したり、批判したりする、精神の全体的はたらきにほかならない。それを、純粋言語次元にのみひきとどめるものがもしあるとすれば、それは、特殊専門的な言語関心にほかならないが、国語教育をそういう関心に限定することは、あきらかにむりである。内容を不自然に追放するのでなく、読みの自然過程を、のびのびと全体的に発展させる指導こそが最も望ましいと言ってよいだろう。

しかし、ことばは森羅万象にゆきわたっており、そのあらゆる局面において、ことばと内容の両面にわたって、ゆきとどいた検討を加えることは、現実的に不可能である。その両方に渡ろうとすれば、内容的選択が不可避であり、実際に、おのずからそうなってきている。人は、国語教材として、伝統的に、ほとんど、特殊専門論文をとりあげず、実用文をとりあげず、日常雑文をとりあげない。そして、それは、ほとんど、さきに私の定義した広義の文学に集中している。国語教育を純粋にことば本位に考えれば、これはあきらかにかたよりである。しかし、私は、そのことを基本的に容認し、そして、それに理論をあたえるべきだと考えるのである。

つまるところ、国語教育は、形を主としては言語教育、内容を主としては文学教育と、明確に規定してみたらどうかというのが、私の考えである。すでに、私は、広義の文学を人間の表現と規定した。そこで、言いかえれば、国語教育は、その半面の内容的目標を、人間についての感性と認識の深化に見定めたらどうか、ということになる。

狭義の文学つまり言語芸術のいわゆる鑑賞や、あるいは、その知識の教育を、国語教育のなかで過大視する傾向には、私は賛成しない。それを何びとにも必須のものとはけっして考えないからである。しかし、人間についての省察を深めることは、人が人として存在する以上、何びとにとっても重要なことであり、むしろ、あらゆる教養の根幹と言えるかもしれない。にもかかわらず、それを直接にあつかう教科は、ほかに存在しない。倫理や社会がそれにかかわるが、側面的なかかわりである。そこで、私は、国語科は、言語教科であると同時に人間教科であるという意識を確立することが望ましいと考えるのである。

しかし、おそらく、多くの人は、こういうことばの大仰さにためらいを感じるであろう。そして、それを健康な感覚だと私も思うのであるが、しかし、これは、従来無意識的におこなわれていることを意識化しようということにほかならない。人間についての知識を上から体系的に教授するといったイメージをもし持つならば、それこそ、ためらうのが当然であるが、こういう問題を教条的にあつかうことは最も危険であって、むしろ、それは意識して避けられなければならない。物にふれ、時に応じて、人間のさまざまな生きかたや、内面に感応し、考えること以外に、どんな道もないのであり、そういうことであれば、それは、すでに、国語教師が、大なり小なり、教材を機縁としてやってきていることである。そして、そのとき必要なのは、かざらないはだかの心と、まじめで柔軟な追求力とであって、固定信条や特殊知識などではない。

そういう意味あいにおいて、私は、国語教育が、内容的に人間認識教育として自立することを提唱したいのであり、そして、その人間認識こそが、ほかならぬ文学教育の核心であると考えるのである。

三

ここで、話を狭義の文学へうつしたい。以後、ただ文学と言えば、すべて、普通に言う狭義の文学のことと解されたい。

文学表現の基本特色を、ジャンルの区別なく、一口で言うとすれば、それは、究極的に像を顕現させるという点にあると言ってよいだろう。このほかに、文学表現を他の言語表現から区分して考えうる基点はない。

像は、言うまでもなく想像力の所産で、ねらう対象をまるごと意識のうえに現前化させるものである。そして、それは、人間の対象領略の基本的一形式である。これとならぶのが、いわゆる概念で、概念は、対象を分析して、そこから普遍的な要素あるいは理を抽象して得られるものである。人間における広義の認識（思考）は、この概念中心の認識と、さきの像中心の認識との二形式を持っていると言うことができるであろう。こう言っても、純粋な概念とか像とかは、たとえば、幾何学における点や線にもひとしい仮定存在であって、現実の認識は、何らかのわりあいで、両者を複合させて、機能している。しかし、本質的思考のためには、こういう極の仮定がかならず必要であって、それを現実態とただちに混同しないことを、まず要請しておきたい。

ここで、一つの例を出したい。われわれがある特定の個人の人柄をあきらかにしようというばあい、ひとつの方法としては、たとえば、人間の性行パターンを十項目に分類し、そのそれぞれについて評定するといったやりかたがある。実際に可能かどうかは別問題として、一般に、こういうやりかたを科学的と言うわけで、たしかに、ここには、合理的な明晰さがある。しかし、そのことによって、その人間の全体が鮮明にうかびあがるかというと、けっしてそうはならない。そこで、それは項目の粗さのせいだと考えて、さらに百項目を立てたとしようか。その結果、今度は全体がほぼ彷彿するにいたるかというと、実は逆であって、そうしたばあい、対象は、ほとんど処置のないまでに解体してしまう。実は、未熟な学者

がしばしばこの種の論文を書くので、かれらが力を入れれば入れるほど分からなくなるという研究が少なくないのである。

ところが、何の分析もせず、その人のあるときの逸話をひとつ語るだけで、実にあざやかに、その人柄の全体を、一挙に分からせるという、もうひとつのやりかたがある。そのばあい、よく分かるのだが、しかし、あらためてそれを概念のことばに置きかえようとすると、まったくことばに窮するといったことがある。ことばが追いつかないということもあるし、追いつめると、多義化して、判断が困難になるといったこともある。

もう言うまでもないが、この前者が概念的認識の例であり、後者が像的認識の例である。概念的認識は、合理的明晰性を特質としつつも、対象の肉をけずり、全一性をそぎ落として、解体させる方向性を持ち、像的認識は、逆に、対象を全一的に現前化させるが、命題的な明晰さを欠く。最もよくバランスのとれた認識は、おそらく、この両者の相互補充によって実現すると言ってよいだろう。しかし、そうだけ言ってしまうと、認識の真に動的な生態をとり逃がしてしまう危険がある。

この両認識の力の方向はあきらかに逆であり、両者の真の関係は対立抵抗の関係にあると言わなければならない。像は、その具象的全一性において、概念の硬直性や抽象的一面性に強くあらがって、その更新の源泉となり、また、概念は、その合理性において、像の恣意性や曖昧性をきびしく規制して、これを秩序づける。というふうに見ると、両者は、ことばの真の意味において、弁証法的相関者であると言うことができる。この両認識の対立が、認識の推進の、いわば動力になっているわけである。

ここまでくれば、文学の本質とその基本的な役割とについての展望が開けてくる。

文学は、もちろん一義的に像であるわけではない。それは、概念的思弁をつつみこんで成立するのであるが、ただ、それが、究極的に、像をねらい、像を顕現させる表現であることは動かない。これに対し、論説文などは、像にささえられつつも、究極的に概念を志向することにおいて、文学表現と区分せられるのである。人は、人間の—人生の新しい認識を志して、文学創造におもむくが、その把握のしかたの特徴は、個別的、具象的、全一的なところにある。いわゆる科学的な把握が、普遍的、抽象的、局面的になるのと、ちょうど反対である。そして、その反対のところに、文学の本質と、独自の機能はあると言ってよいのである。

科学を第一義的に尊重する近代にあっては、学問的、概念的な認識を絶対化する傾向が強いのであるが、それを相対化する象徴的な存在が文学だと言ってもよいのではなかろうか。われわれは、文学において、人間の、人生のいわばトータルな現前を見る。それは、われわれの全感覚・全認識によって了解される、生きた全一体であり（文学の根本規定によく使われる感動なるものは、その結果現われる。）、どんな精緻な概念的認識も、この富を奪いつくすことはできない。それは、概念的認識にとって、無限の宝庫であり、あるいは、絶えず自己否定を迫られる対立物でもある。すぐれた文学が、つねに、時代の通念をどんなにみごとにうち破り、たち越えて出現するかは、多少とも文学史に関心のある者にとっては、自明のこと

であろう。すぐれた文学の永遠性といったことも、このこととかかわりがあるだろう。

とすれば、人間を追求する国語教育が、最もトータルな人間表現である文学作品を教材の中心部に据えるのも、当然だということになる。国語教育において文学が重視されるとすれば、なによりもその意味においてでなければならない。人は、よく、文学表現を文章の最もすぐれたものと見なし、だから、国語教育は文学を重視するのだと言ったりするが、それはひどく単純な発想であって、科学文・実用文・芸術文等は、それぞれ性格を異にしており、すぐれた文章などというものを一元的に設定できるわけはないのである。

四

とかく問題の多い文学教育の方法論も、以上のような文学の基本性格を明確にふまえ、さらに、像のありようについての考察を深め、かつひろげることによって、正されなければならない。しかし、この点に深入りすることはさけて、二、三の基本的な問題点だけを指摘しておきたい。

まず、文学教育が、なによりも、生き生きとした想像力の励起につとめるべきことは、言うまでもない。微細な表現も看過することなく、それをささえとして、像を鮮明に立ちあがらせることが、第一の要訣である。そのばあいに必要なのは、よくおこなわれる要約読みではなく、逆の細部読みであり、さらにそれを拡充する読みである。

ただ、ここで注意しておかなければならないことは、像は、表現をささえとして、おのおのの読者が主体的につくりだすもので、表現の質にもよるが、そこにかなりの自由があるということである。むしろ、文学鑑賞のよろこびの一側面は、そこにあると言ってもよいだろう。われわれは、だれでも、大なり小なり、作品を自分にひきつけて像化し、それによって、享受を全うしているのである。もちろん、骨組としての表現は厳密におさえられなくてはならず、そこに、きびしい指導が必要になってくるが、そのうえの自由を、教師くさい決定論によって犯してはならないのである。逆に、各自の像を自由に出しあって、たがいの想像力を刺激しあうことが望ましいと言うべきであろう。

次に、像の意味を問うことが重要な課題になる。もっとも、「次に」と言っても、それは、けっして、時間的な順序を固定するものではない。実は、像には、意味軸の確定によって明確化する側面があり、実際には、循環的に追求されるはずであるが、ここでは、叙述の便宜によって、一応、分けて考えるのである。

一部には、文学の超概念的側面を重視して、もっぱら感覚的受容のみを強調する人々があるが、それは一面観にすぎないと私は考える。文学世界が概念を越えることは言うまでもないが、それは、作家の精神によって浸透された世界で、単なる世界ではない。作品は、作家の、世界への問いの線上に構築されるもので、一般の概念のことばの及ぶと及ばざるとを問わず、何らかの意味あるいは問いによって浸透されない文学はありえない。だから、文学は、感じさせると同時に、かならず考えさせる。これは、言語芸術のいわば必然であり、文学の問題を音楽や美術を手本として考えてはならない

のである。たとえ、一部の詩がそれらにどんなに近づくことがあるにしても。

むしろ、文学は、われわれの概念的思考が最も鍛えられる場であると言ってもよいだろう。

すでに述べたように、像的言語は、抽象的言語の及びえないところまで浸透する。そういうことばであればこそ、それは、概念の閉鎖性をうち破り、これを正当に伸長させる力を持つのである。概念の最も有効な滋養は像であって、けっして、別種の概念ではない。意味を深く蔵した像と格闘することによって、われわれの、人生への、人間への思索は、初めて本格化すると言ってもよいかもしれない。

そのことに関連して、ここでぜひ注意しておきたいことは、文学を解いて、数学的な意味での正答を出すといったことは、けっして考えてはならないということである。作品が作家によって方向づけられた存在である以上、その底に、思念の一定の方向性を見いだしうることは当然だが、全体としての像が、特定の概念に還元されることはありえない。像は概念を越えるとは、言いかえれば、多くの概念的な切りこみをゆるすということで、実際、すぐれた作品ほど、多くの、あるいは次元の深まった意味を開示してやまないのである。

言いかえれば、読者は、その主体の志向と背丈にあわせて、作品から何かの意味をひき出してくるのであり、そのとき、争われうることがあるとすれば、それは、表現を、不足なく、確かにふまえているかどうかということと、どの意味がより深く、また、よりひろやかであるかといったことである。このうち、前者は、ある程度正誤の対象とすることができるが、後者は、価値範疇に属する問題で、正誤の範疇には属しない。文学の解釈に終点を措定してはならないのである。

もっとも、実際の作品には、こんなことを言うほどの奥行きを持たないものも多い。しかし、そのばあいも、作品によってよびさまされた問いを、作品をつき抜けて、いっそう、深く、広く問うことによって、逆に作品を対象化する読みかたがある。つまり、批評的な読みであるが、作品との真剣な対決は、読者を、おのずからそういうところまで導くので、そういう射程において考えれば、読みは、本質的に無限であると言ってよいのである。

つまるところ、文学教育に私が最も要請したいことは、文学の本質にしたがって、いかにも教室的な、けちな正誤観念から大胆に離脱し、ことばの最も正当な意味における主体的な読みを、のびのびと体験させることである。いまは、これだけのことをつけ加えておきたい。

（本学文学部教授）